

推定平安宮内膳司地域内
発掘調査報告

平安博物館

推定平安宮内膳司地域内発掘調査報告

上野佳也・渡辺 誠・片岡 肇・鈴木忠司

I 位 置

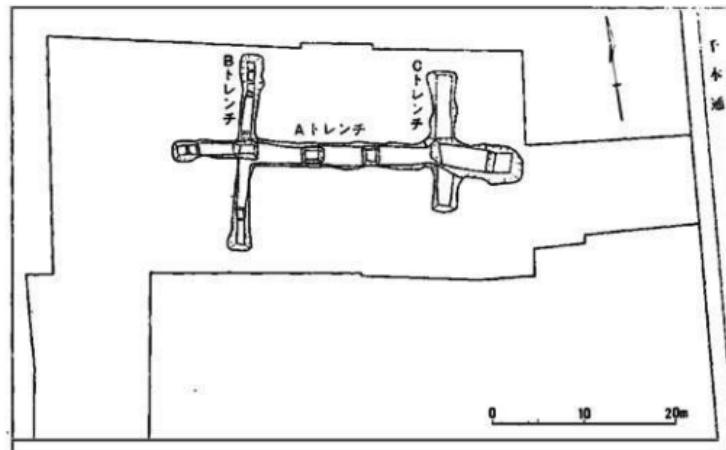
今回調査対象となった場所は、京都市上京区千本出水下ル十賀町396-1番地で、スーパー
業・千本支店建設予定地である。本地域はほぼ東西方向の長方形をなし、東は千本通に面し、



第1図 退跡付近地図

西は六番町通の延長上やや内側に相当する。南北は民家を隔て、北は出水通、南に新出水通がある(第1図参照)。

広さは東西約70m、南北約25mであるが、西南が鏡の手状になり、東西約13m、南北約18mの土地が新出水通に面している。この部分にはムクノキの大木があり、この北側には未撤収の建物がある。また千本通に面した部分は南北の巾が狭まり、かつ重機の進入路などとして確保しておく必要があった。結局以上の部分を除いた中央部分、東西約40m、南北約25mの範囲を調査することになった(第2図参照)。



第2図 退路平面図

この地域は、平安宮内膳司の南端部に相当すると推定されている。

(渡辺 誠)

II 調査経過と結果

上記の土地に、スーパー栄・千本支店の建設工事を実施するに先立ち、京都市文化観光局文化財保護課の指導にもとづいて、発掘調査の実施が平安博物館に対して要請された。当館ではこれにもとづいて、上野佳也(考古三課)、渡辺 誠・片岡 敏(考古二課)、鈴木忠司(考古一課)を担当者とし、昭和47年11月6日より同月17日までの12日間にわたり発掘調査を実施した。

11月6日、現地で京都市文化財保護課、スーパー・栄及び当館の関係者が打合せを行なった結果、拂土を置く地域の確保も考え、上記の地域に東西1本、南北2本のトレンチを設定することにした。

発掘は、まずA, B, C各トレンチの交点にテスト・ピット2カ所を設け、順次各トレンチを機械と作業員の手掘りと併用して発掘した。その結果、現地表面下約4mにいたって地山がみられたが、それまでは全くの近世の擾乱ないし埋立て土であり、遺構の遺存ないし検出は望めそうにもないまま調査を終了した。層位の詳細と、若干の出土遺物は以下に記すとおりである。

(波辺誠)

III 層位

調査区域内に設定された試掘溝の断面の観察によって、土層の堆積状態が知られたが、これによれば区域内全般にわたって、おおむね均一の層序を示しており、基本的には以下に述べるように三つの性質を異なる土層が識別された。

もっとも上部には、近世以降現代にいたる時期の家屋構築に伴う整地土(第3図2~6)、瓦片、陶器片を含む糞棄土(同7)、埋立土(同1)がある。

これにつづく中間部には、陶器片、礫、粘土塊などを含む比較的軟かい黒褐色の有機土層がある(同8)。この層はBトレンチⅡ区の南部で40点の瓦片が出土したのを中心とし、平安時代に属する瓦片をもっと多く出土しており、平安宮跡に関係した地層という観点からすれば、もっとも注意すべき部分に相当する。ただし土層に含まれる多量の近代の陶器片などの存在、平安時代の瓦が細片としてこれらに混じって検出されるという出土状態などから推定して、この層が堆積時本来の姿のまま現代に至っているとは考えられず、大きく擾乱を受けているとみるべきであろう。

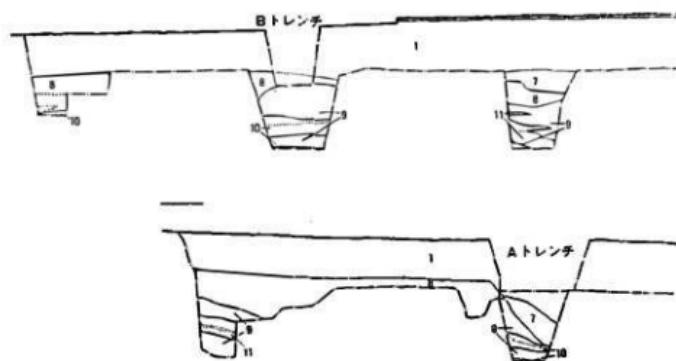
もっとも下部には黄色砂疊層と黄色粘土層の互層(第3図9, 10)がある。砂疊層は下方に行くにしたがって大形の礫を含む傾向が認められ、粘土層は部分的に砂を含んでいる。ただし場所によっては(AトレンチⅢ区第1, 2区)、近代の瓦片を含む黒色土が介在したり、砂疊は汚れて暗褐色を呈したりして、二次的な堆積を示している。こうした部分は先に述べた黒褐色土層と関連して、わずかではあるが平安時代に属する瓦片を出土している。以上のように黄色砂疊層および黄色粘土層は、当調査区域内での基底層であり、いまだ人為の及ばない地山層に相当するものと思われる。

(鈴木忠司)

IV 遺物

上述のように遺跡は後世の擾乱を全面的に受けており、一次的な状態で出土した遺物は全くなかった。また、遺物の量もきわめて少なく、特に平安時代に属するものは断片的に瓦類の破片が出土したに過ぎない。まとまりのあるものではないが、以下に瓦類の主なものについて簡単に触れておく。

(1) 軒丸瓦 AトレンチⅡ-1区の擾乱層の下の黒褐色土層から出土した蓮華文軒丸瓦1点のみである。約4分の1個体の小破片であるが、推定復元して図示した(第4図1, 図版1の1)。胎土には小砂粒を含むが比較的良好で、焼成も堅硬である。外区は内傾する素文の外縁



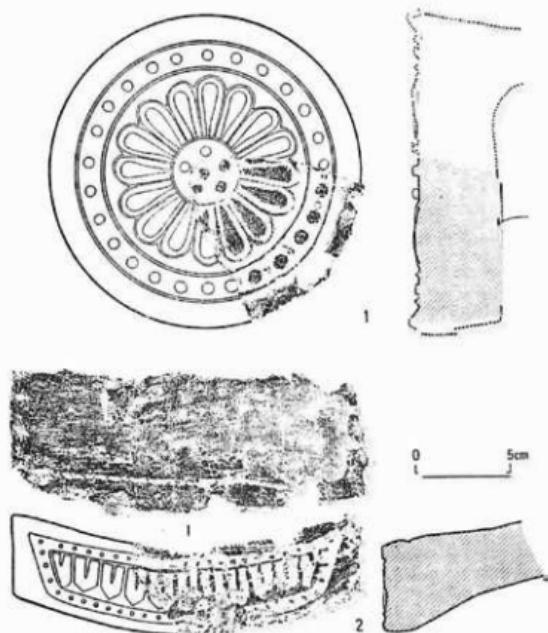
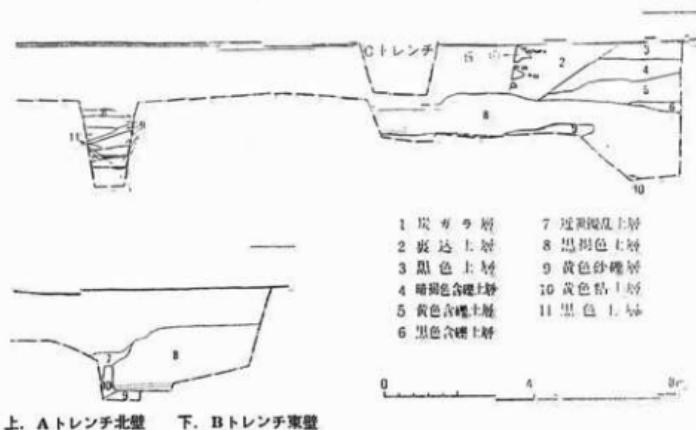
第3図 試掘溝断面図

と珠文を施された内縁とから成り、両者は間線で隔されている。この珠文は径7~8mmと大きく、しっかりしたものではあるが、間隔が不統一であること、個々の珠文が上から押さえつけられたらしく、せり出していることなどから、一つ一つ貼り付けられたものとも考えられる。また拓影でもわかるように珠文と珠文の間に径2mm前後の小さな凹凸がある。これはおそらく、あらかじめ珠文を貼り付ける位置を決めた印のようなものであろうか。それぞれの間隔は約1.5cmと全く均等であるのに対し、実際に貼り付けられた珠文はそれらからはずれており、間隔もまちまちである。ただ上にも述べたように、これらの印は凹んだものも突出したものも見られるので、木型の段階で刻されていたものとは考え難い。

内区は、おそらく16弁の單弁蓮華文が、中房には1+5♀の蓮子が配されている。個々の蓮子は、外区の珠文よりやや小さいが、全く同様の印象を与えるもので、蓮子と蓮子の間の平坦な部分に製作時に付けられたと思われる指紋のみられることからも、この蓮子も貼り付けによるものかもしれない。

作りは比較的重厚で、焼成・胎土とも良好である。本例は、珠文や蓮子が上述のように貼り付けによって作られているとすれば、極めて特異な例であり、類例を知らないが、時期的には平安時代前期のものであろう。

名 称	直 径	内 区				外 区				胎 土	燒 成	色 調
		中房蓮子 径	弁区 径	弁幅	弁数	外区 径	内 縁 幅	外 縁 幅	高 文 横			
單弁十六 備 蓮華文軒丸瓦	(164) (35) ¹⁺ (5)	(110) (16) (T16)	29	15 (S26)	14	6	素文	粗石 混入	硬質	灰褐色		



第4図 内経司推定地出土の軒・九瓦軒平瓦

(2) 軒平瓦 BトレンチII-1区の黒褐色土層から出土した1点のみである。本例は剣頭文軒平瓦で、瓦当面の左側3分の1を欠失している(第4図2、図版1の2)。色調は灰黒色を呈し、胎土中には比較的大きな石も含まれている。焼成はやや軟質で、そのためか瓦当面の中央より左側及び凸面は磨滅が著しい。剣頭文軒平瓦にしては珍しく、周縁を有し、外区には小さな珠文が密に巡らされている。上下外区の珠文は剣頭文の各単位文様の中央の上下と、隣接する単位文様との界線の上下にそれぞれ規則的に配されている。脇区の周縁は上部が7mmと狭いのに対して、下部では1.8cmを占める。本例は上弦幅が18.5cmと比較的小形であるが、重厚な作りで頭は剣頭を呈する。凹面には布目痕が残されており、瓦当面に近い部分には布の端の紐の圧痕が認められる。凸面の状態は上述の如く磨滅が著しく明らかでないが、粗い叩きの痕跡がうかがえる。

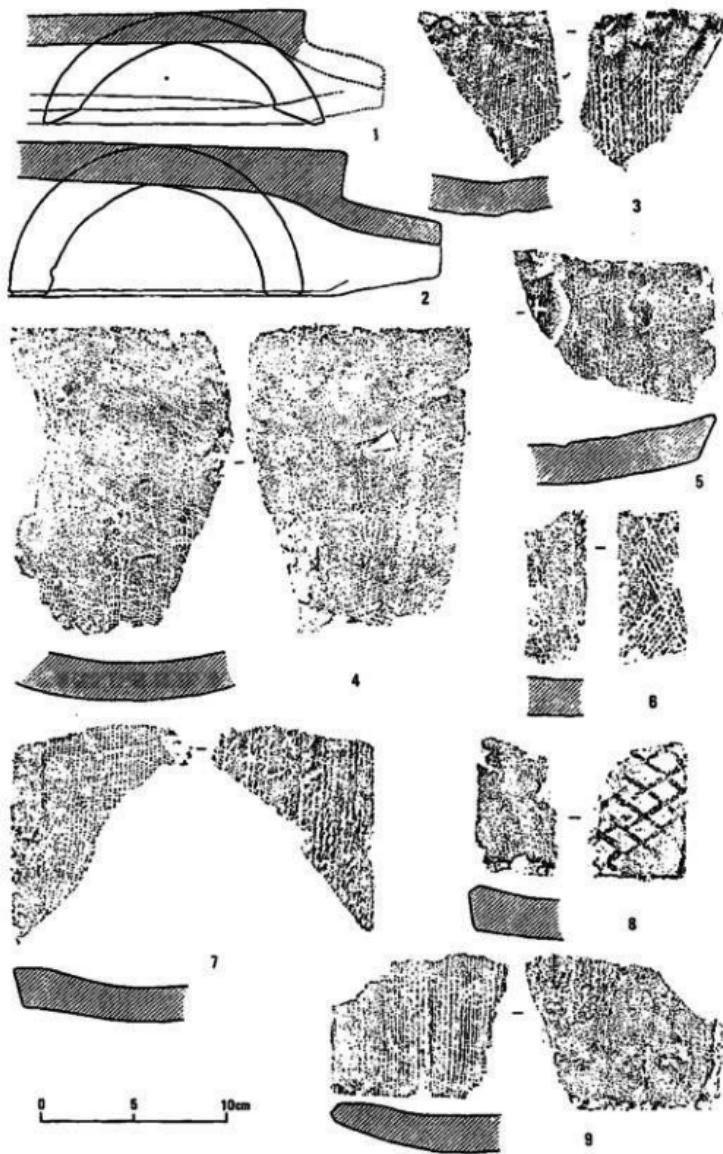
奈良市東寺跡より上外区にのみ珠文帯を持つ例が出土しているが、本例のように外区全周に珠文帯を巡らす例は寡聞にして知らない。時期は平安後期である。^{註①}

名 称	上弦幅	弧高	下弦幅	厚さ	内区 厚さ	内区 文様	上外区 厚さ	上外区 文様	下外区 厚さ	下外区 文様	脇 幅	脇区 文様	文様 の深さ	胎土	焼成	色調
剣頭文 軒平瓦	(185)	19	(183)	46	24	剣頭文	12	(523)	10	(521)	13 (7~18)	S3	2	砂粒 小石軟質 混入	灰黒色	

(3) 丸瓦・平瓦 大部分が小破片であったが、丸瓦7点、平瓦が47点出土した。

丸瓦は2点を図示した。第5図1の例(図版1の3)は玉縁と尻部を欠失している。黒色を呈し、焼成はやや軟質である。凸面は素文だが、凹面はやや粗い布目で、一部に布の縫合せの縫い目が認められる。側縁の面取りはなく、ほぼ水平である。平安時代後期のものであろう。他の丸瓦もほぼ本例に類する。第5図2の例(図版1の4)はかなり時期の下るものであるが、大形の破片であったので図示しておいた。他の丸瓦に比して焼成は堅緻で、灰褐色を呈している。凸面は丁寧に範削りが施されており、玉縁にはクロ目が見られる。凹面はきわめて細かい布目痕が残されているが、この布で特徴的なことは、比較的太目の撚糸を運針の如く縦方向に粗く縫いつけてあることである(図版1の5)。側縁はかなり大きく面取りされており、内側に傾斜している。本例も、一般に言われているように、筒状に作られたものを2分する技法で製作されたとすると、横断面は2分の1円弧、すなわち凸面の曲率から知り得る円の中心点と両端が成す角度が約180°を占めるはずであるが、本例は150°で、2分したとすれば無駄を生ずることとなる。製作技術の面で検討を要するのかも知れないが、1例のみであるので指摘するにとどめる。中世の所産であろう。

平瓦も出土量が少なく、小片が多い。これらの平瓦は数例の例外を除いて、大部分が凹面に布目痕、凸面に縫目が付されたものである(第5図3~7、図版2の1~6)。その中でも図3及び7に示した例のように、凸面の縫目が長軸には平行に全面にみられるものが最も多い。3の例の凸面端部近くには指頭圧痕が見られる。6の例は小片であるが、凸面の縫目は斜



第5図 内藤司推定地出土の丸瓦・平瓦

めに交叉している。凹面の布目は割れ。4の例は比較的大形破片であるが、凸面の縄目は数条のみしか認められない。凹面の布目痕は長軸方向に大きく引っぱられて乱れている。この例では凹凸両面に糸切り痕がはっきりと残されている。他に例外的なものとして、凸面は縄目であるが凹面に板目と思われる痕跡を残す例（同図9）、凹面は比較的細かい布目痕で凸面に斜格子の叩き目が付されている例（同図8）などがある。なお、第5図5に示した例は凹面に剥離しの文字の認められる平瓦であるが、文字の半分以上を欠失しており判読できない。型は陽刻のものである。

平瓦の瓦質は、4の例の如く灰色を呈しセメント瓦のように堅硬なものも若干あるが、他は比較的軟質で黒色・灰褐色・赤褐色などの色調のものが多い。時期的には大部分が平安時代後期に属するものであろうが、一部中世のものも含むようである。

瓦類以外の遺物では明らかに平安時代に属すると言えるものはなく、近世の土器・陶磁器類が若干出土したにすぎないので、特に触れない。

（片岡 順）

V 内膳司について

内膳司は「ないせんし」または「うちのかしわでのつかさ」といわれる。その職掌は供御の調理や毒味をすることであった。長官には奉膳2人がおかれて、御膳を總知し、進食の際まず召みた。次いで典膳は6人、令史1人、膳部40人、使部10人、直丁1人、班使20人であった（『令義解』）。『続日本紀』には、神護天皇2年（768）に海機、安藝國氏をもって奉膳となし、他氏が任せられる時には正となすとする。その後、桓武天皇延暦11年（792）、兩氏の争いから安藝氏が失脚し、高橋氏のみが任せられる所となつた。また後に宇多天皇嘉平8年（806）には園池司を内膳司に併合した。

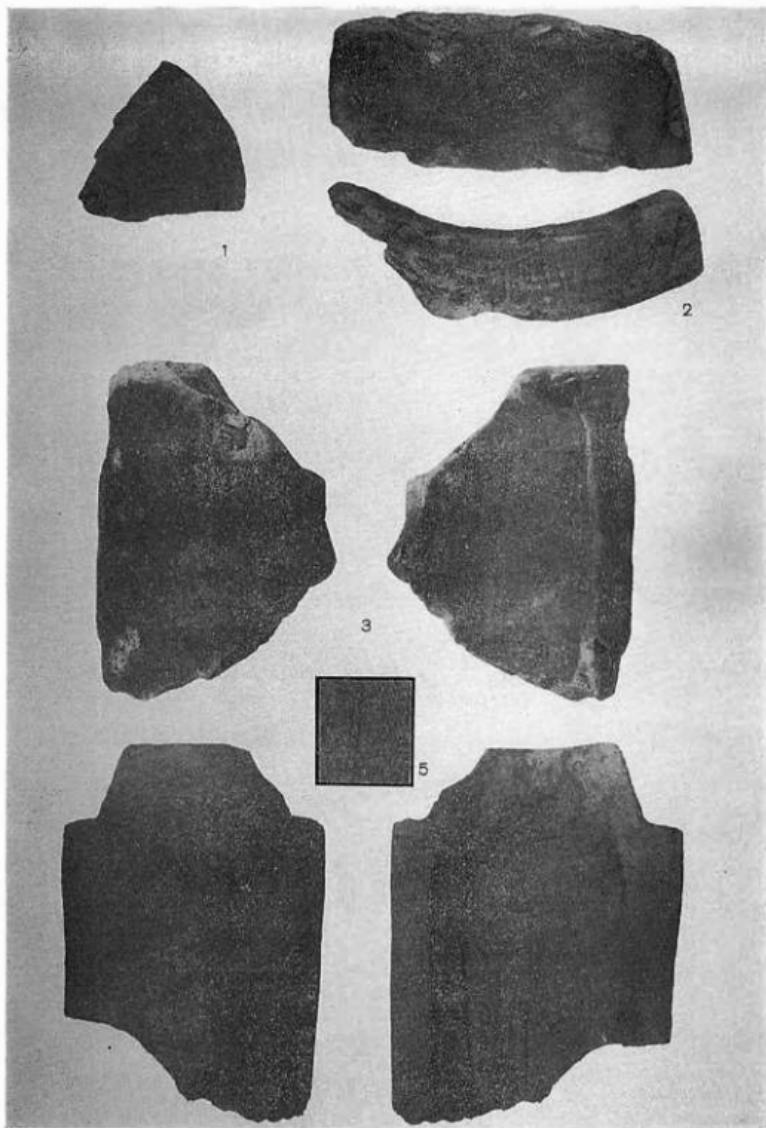
内膳司の殖地や位隸に関する記録は少ない。『日本紀略』によれば長和2年（1013）に采女町が焼亡した際、内膳司の籠城が焼けている。さらに18世紀の『大内裏園考證』によれば、内膳司は内裏の西方、采女町の西に隣接し、西は寛松原に面している。また中和院の北、絲所の南にある。

この内膳司を現在の位置にあてはめると、上京区千本出水下ルの付近と推定されているが、今回の発掘では後世の櫻乱甚だしく確認を得るに至らなかった。

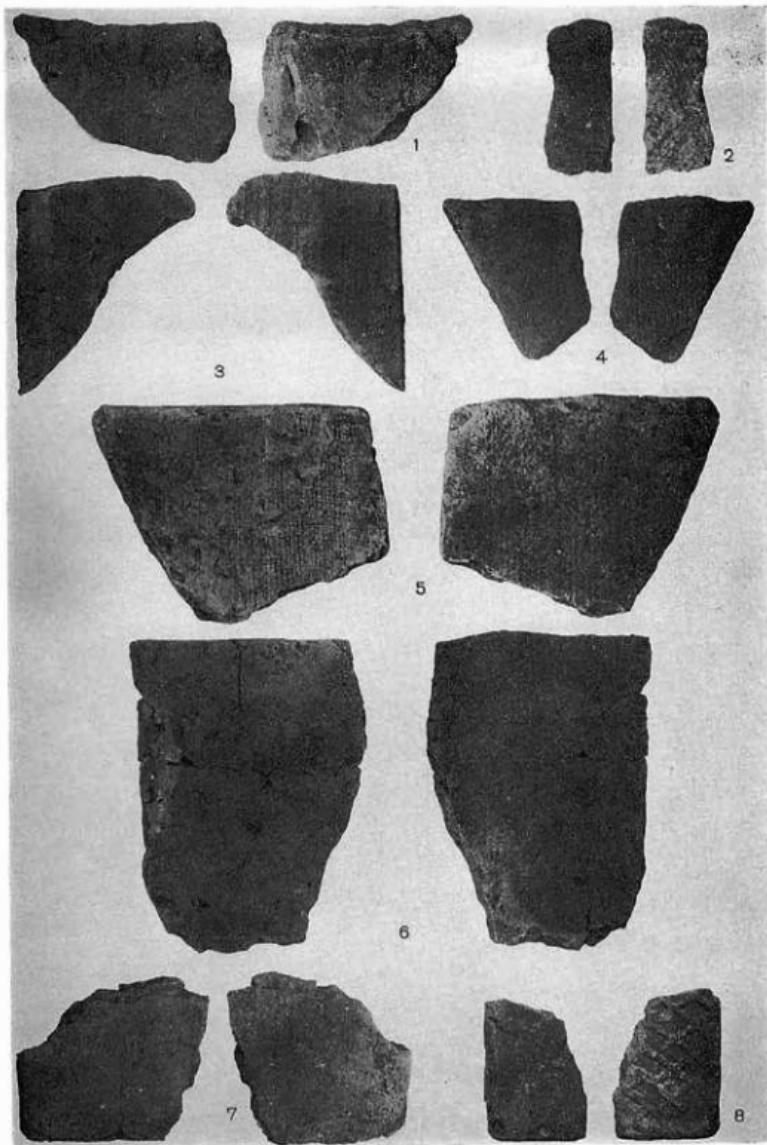
（上野佳也）

なお末尾ながら今回の発掘調査に参加協力された、川端敏史（同志社大学文学部）、長谷川豊（同法學部）、芝野康之（大谷大学文学部）、三宅純子（同）の4氏に対し、謝意を表する次第である。

註 ① 京都大学文学部編『考古学資料目録』2、京都、1968年、144～5頁参照。



内蔵司推定地出土の軒丸瓦・軒平瓦及び丸瓦（5は4の片面粘土型）



内藤司推定地出土の平瓦

推定平安宮内膳司地域内発掘調査報告

発行日 昭和49年3月31日

発行者 平安博物館
京都市中京区三条大路北・高倉小路西
振替京都850番 電話 075(222)0888

制作 ピクトリー社
京都市中京区油小路錦上ル
電話(221)1420